

自作を教材として用いる試み 3

黒 木 重 雄

An Attempt to Use my Own Works as a Teaching Material 3

Shigeo Kuroki

10年前から『自作を教材として用いる試み』と題して自作を解説している。今回は、2008年10月から2012年9月までの4年間で制作した20作品の中から、8点を取り上げた。なるべく、その絵に至った心の機微を記すように心掛けた。

1 Polar Bear

2009年、アクリル画、182.0×227.5cm

予定通り描き上げても、絵がつまらないことがある。だからといって、何をどうすれば良いのか解らない。こんな時は、スタートの時に想い描いたイメージが悪かったんだと諦めることにしている。とはいうものの、数か月を費やして描いた作品を、そのまま倉庫に仕舞い込むわけだから、頭の片隅に腑に落ちないものとして引っ掛かってしまう。白熊が空高く吊るされている絵も、そんなひとつだった。倉庫にしまって早2年。ふと思った。あの絵の画面下に街並みを描き足してみてもはどうだろう……。早速、倉庫から引っ張り出して、出来の悪い絵を正面から眺めてみた。なんとかなるかもしれない。画面下に街並みを描くなどというのは最も簡単なアイデアだ。どうしてそんなことに気が付かなかっただろう。まあ、仕方がない。絵を描いているときは案外何も見えていないものだ。つまりは、自分の絵を客観的に見られるようになるのに2年程かかったということだ。

ところで、街並みだが、まずイメージしたのは、ニュージャージー側から見たマンハッタン。もう20年近くも前になるが、ヤオハンからの帰りに見ていた景色が思い浮かんだ。マンハッタン遠景は美しかった。さて、思い浮かんだのはいいが、あいにく頭の中にぼんやりとした映像が残っているだけで、写真などの資料は手元に無い。ならば、改めて取材に、と言いたいところだが、ニューヨークではちょっと行ってくるというわけ

にもいかない。一応、インターネットの画像や写真集も見てみたが、当然のことながらイメージにピッタリというものはあるはずもない。しょうがない、別の街並みにするか。と、ちょうど東京に行く用事が入った。そうだ、カメラを持って行って街並みを撮ろう。これまたおぼろげな記憶だったが、上野駅の陸橋から南方向に見える猥雑な街並みを思い出していた。マンハッタンの整然とした美しさとは真逆の風景だ。悲運の白熊にはマンハッタンより上野のほうがお似合いかもしれない……。数日後、曇り空の下、上野駅でカメラを南に向けた。いい写真が撮れた。福岡に戻ると早速、その写真を元に上野の街並みを画面下部に描き足した。絵に空間と物語が宿った。

さて、手直しをする前から解っていたのだが、街並みを画面下に描き加えたことによって、画面のバランスが崩れた。そもそも、この絵の背景には何も描かない予定だったので、白熊は、画面の中央に配した。“ぼつん”を表すために上半分と下半分、右半分と左半分を同じにしていた。そこへ、画面下部に街並みが入ってきたので、画面上部が空きすぎてしまった。白熊を30~40センチ上に動かせば解決なのだが、描いてあるものは動かせない。そこで、苦肉の策として考えたのが、画面上部に何かを描き加えること。つまり、絵を成立させるために、後付けでモノを描き足すということ。後付けの連鎖だ。嘘に嘘を重ねなければならなくなった感じに似ている。実はこれ、絵を描く際に、やってはいけないことだと思っていたし、そう言ってもきた。随分ためらったが、バランスが崩れたままにはしておけないので、描き加えることにした。何を描くかというと、上空に配しても重たくならないほどの軽やかさで、なおかつカラフルなもの。たどり着いた答えは旗。旗の中でもとりわけカラフルなフランス国旗を描いてみた。これによって、視線が画面上部に誘なわれ画面のバランスは良くなった。よしよし、と言いたいところだが、上野にトリコロールでは意味不明。何を描くかのバランスは崩れた。あっちを立てればこっちが立たずだ。やっぱり出発点がだめだったようだ。

2 Fish eye

2010年、アクリル画、91.0×91.0cm

2009年の正月に天神のフィギュア屋で買った怪しい裸人形を引っ張り出した。フェティッシュな作りで胸だけがやたらと大きい。歪んだ身体は歪んだ社会を映しているようだ。この人形をモデルにして2点の絵を描いた。1点は身体に不釣り合いな胸だけ(『人形の胸』259ページ参照)。そしてもう1点は頭だけ。

頭だけの絵を描くにあたって、困ったことがひとつ。実は、この人形は眼球が別売り

だったので目が入っていないのだ。なので“目をどうにかしなきゃ・・・”と、ずーっと考えていた。2010年3月、ゼミ旅行。ゼミ生と一緒に湯布院に行った。貸別荘だったので、夕食の鍋パーティーの食材を買いにスーパーへ。学生さんたちはワイワイと楽しそうに買い物をしているが、私は所在無く店内をぶらぶら。と、突然、目が合った。湯布院の山奥のスーパーの狭い鮮魚売場の太刀魚の目と、目が合ったのだ。これだ、魚の目だ。ゼミ旅行から帰ると早速、近所の鮮魚店へ行き、太刀魚に狙いを定めた。「すいませーん、絵に描きたいんですけど、太刀魚の頭だけっていただけますか?」。店主は嫌な顔もせず、切り落としたての太刀魚の頭を新聞にくるんでくれた。0円。持ち帰るとすぐに、スタジオに生臭い匂いを漂わせながら、人形の頭に魚の目を描いた。哀しい絵ができた。

3 Ark

2010年、アクリル画、227.5×546.0cm

※個展会場（右：Ark、左：人形の胸）

2010年4月19日～4月24日、art space kimura ASK?（東京）

レオナルドもミケランジェロも、多くの先人達は、超大型作品を描いている。とても同じ人間だとは思えない。昔の人はすごいなあ、と感心してしまう。“おいおいちょっと待て、感心してどうする、同じ人間だぞ、お前も描いてみる!”というわけで、『最後の晩餐』（4m×9m）の4分の1サイズ、『システイーナ礼拝堂天井画』（13m×36m）の50分の1サイズの、2m×5mの作品を描いてみることにした。まずはキャンバスを張って、スタジオの壁に並べてみた。壁いっぱい白いキャンバスが広がった。世界レベルには足元にも及ばない小型画面なのだが、私はその大きさに怯んでしまった。“失敗したらどうしよう・・・”。本来ならば、未知の大きさの画面なのだから、新しい展開を試す絶好の機会なはずなのに、守りに入ってしまった。冒険の域には到底踏み込めなかった。以前描いたことのある丸型蛍光灯をアレンジして再び描くことにした。丸型蛍光灯は自分らしい題材だし、もう1回くらいは瑞々しさも残っているかもしれない。などと都合よく言い訳して描き出した。脚立に登ったり降りたり、離れたり近づいたり、の繰り返し。多少上手くないところもあったが、蛍光灯の描き方は判っていたので、大きく失敗することはなかった。できるだけことはやった。完成。大きさにてこずった分、やり逃げた感があったが、もぎたての作品の持つ新鮮さは宿らなかった。やっぱり二匹目のドジョウは居なかった。

4 なみだ目

2010年、アクリル画、227.5×182.0cm

あくびをした拍子に、透き通った瞳から、ポロポロと大粒の涙がこぼれた。この涙には大意は無さそうだ。雑種猫ゴマと一緒に生活して10年以上になる。表情や仕草や鳴き声でいろいろなことが解るようになった。とはいえ、もちろん、理解し合えているなんて傲慢なことを言うつもりはない。

生後数週間、室見川の堤防で泣いていた子猫を我が家に連れて帰った。そのままにしておけば、衰弱して死んだか、どうにか生き伸びて野良猫になったか、のどちらかだったはずだ。ところが、死か野良かの運命の分岐点にいた猫を、通りがかりの人間が、ひょいと拾い上げて、あっさりとか家猫にしてしまった。こちらとしては助けてあげたつもりでいるが、はたして、猫はどう思っているのか。あれから十数年、ひもじくなく、寒くもなく、敵もない境遇を気に入ってくれているだろうか。例えば、野良猫が芝生を横切るのをガラス越しに見ながら、あの自由に憧れてはいないだろうか。例えば、夜中に響きわたる、けたたましい盛り声に、心を揺さぶられてはいないだろうか。もしかすると、自由と恋を奪った代償は、おいしい食事と温かい毛布では到底償えないのかもしれない。

気づくと、ゴマが、少し離れたところからこっちをじっと見ていることがある。遠すぎて、表情は読み取れない。なに？ ふと、こんな泣き声が聞こえる。「悔しくて、悔しくて、涙が溢れてくるけれど、ポロッとこぼすとあいつに気づかれて・・・“どうしたの？”なんて声でも掛けられようものなら余計に悔しいから、すんでのところでは我慢しているんだ」。

家猫ゴマの顔を描いてみた。うっすらとにじんだ涙でさえも判るように、とびっきり大きく描いてみた。

5 イノセンス

2011年、アクリル画、182.0×227.5cm

2010年9月、自転車で大濠公園の蓮池を横目に健康診断に行った。その帰り道“蓮も終わりだなー”と立ち止まって近づいてみた。すると、池の中に仕掛けられた四角い罟の中で何かがひしめきうごめいていた。ミドリガメだ。縁日での面影はなく30cm超に成長している。「出せー」「出せー」「出せー」正式名称はミシシッピーアカミミガメ。蓮を食い荒らし、在来種を駆逐する。害獣らしい。えっ、害獣って何だ。そもそも、勝

手に遠くから連れて来たのは人間じゃないか。そもそも論でいけば、人間が一番の害獣だ。亀に限らない、世の中で起こっているあらかた全ての不都合は、そもそも人間が悪い。人間の傲慢さ加減に辟易する。などとひとり憤慨していると、あれっ、死んだコイが動いてる。よく見るとミドリガメが水中で鯉の死肉を食いちぎっている。どれどれと近づくと、人の気配を察したらしく、立派なミドリガメがすっくと水中に消えていった。嬉しかった。たくましく生きている奴もいる。亀を優しく隠す枯れかけの蓮が一段と美しく見えた。

何も加えず、何もひねらず、4か月かけて蓮を描いた。最後に亀を描いた。謝罪の気持ちを込めて甲羅の模様的一本一本を忠実に描いた。翌日、目が腫れた。眼科に行った。結膜炎になっていた。瞬きもせずに目を酷使したのが原因らしい。ちょっと誇らしかった。

6 極楽ホテル

2011年、アクリル画、182.0×227.5cm

夏休みは、無駄に過ごしてしまうことが多い。たぶん、まとまった時間があるんだから充実した仕事をしたいという思いが強すぎて、一歩目の踏み出しが遅くなってしまふからだ。この反省を踏まえて、2009年の夏休みは、見切り発車で制作に取り掛かった。スケッチブックに走り描きしてあったのは、現代版一寸法師。遙か長い暗黒の用水路を抜け、お椀の旅も終盤、眼前に広がる大水路、そこで現代版一寸法師の目に飛び込んできたものは、京の都ならぬ〇〇の光景。この〇〇の光景の部分が未定のままスタートした。とりあえず、用水路でも描いていれば、そのうちアイデアが浮かぶだろう、と思っていた。が、しかし、一向に、これだ！というものは思いつかず、〇〇は迷走に迷走。とうに用水路は描き終えたものの、対岸の世界は白紙のまま。時間だけがただただと過ぎ、結局は夏休みを棒に振ってしまった。そして、さらには、新学期のスタートとスタジオの引っ越しが重なって、あれこれあたふたしている間に数か月が経ち、すっかり用水路の気分は萎えてしまった。とりあえず、この絵は後回しにして、別の絵を描いたら、今度は、あっという間に1年が過ぎた。そろそろ用水路の絵も仕上げなきゃと思い、再び引っ張り出してはみたものの、何かアイデアがあるわけでもなく迷走から再スタート。ぼーっと眺めながら思った。“用水路の陰鬱な色に対比させて対岸は派手な色がいいかな・・・ピンクかな・・・”。ピンク、ピンク、ピンク。ピンクが似合いそうなものを思い浮かべてみるが、どれもピンとこない。再び、ピンク、ピンク、ピンク。

ひとつのアイデアが浮かんだ。ピンクの寝仏像。これだ、という手応えがあったわけではないが、悩むのにうんざりしていたので、少々投げやり気味にピンクの寝仏像を描くことにした。やれるだけのことはやった。2010年8月、完成か？ 離れて見ても、近づいて見ても、斜めから見ても、どこからどう見てもちっとも冴えない。あー、だめだ。もうこれ以上見なくなかったので再び倉庫へ。この絵のことは忘れよう。さらに半年が経った。2011年2月、スケッチブックに向かっていたら、ぼーっと用水路の絵が頭に浮かんできた。成仏できない亡霊のよう。しぶしぶ倉庫からまたもや引っぱり出した。椅子に座り、出来の悪い絵を正面からじーっと見た。覚悟を決めた。成仏させよう。まずは、何がだめなのかを考えた。現代版一寸法師というアイデアはそれなりに面白いし、ピンクの寝仏というのも適度に軽薄・悪趣味で面白い。だとすると、どうやら、それらの面白さを引き出す細かな仕掛けが足りないようだ。そこで、いろんな仕掛けを画用紙で作って試してみた。虹に気球に火の見やぐらにその他もろもろ……。一番良さそうなのは看板か？ とりわけ文字の看板だと画面が引き締まって効果的かも。しかし、寝仏と文字看板とは相性が悪い。派手な文字看板が似合うものと言えば、パチンコ屋かラブホテルぐらいなものだ。どうしたものか……。そうだ！ 仏様には少々失礼かもしれないが、寝仏像を寝仏型ラブホテルにリフォームしよう。そう決まれば、あとはもう次々に楽しい仕掛けを思いついた。サンスクリット語で極楽を意味する看板を立てて、ハートマークのおまけも付けて、煩惱の数だけ小窓を開けて、そうそう、忘れずに車も2台、そのうちの1台は今まさに入庫中。そうだ、仕事中のトラックも1台描き足そう。なんてやっているうちに、なんともんびりほのほのとした風景になった。京の都ならぬ今日の都だ。いい絵が出来た。

足掛け3年、あれほど描くのが辛かったこの絵だが、仕上げの数日は実に愛おしく、いつまでも絵の前にいたいと思った。最後の最後に味わった最高の楽しさが、画面からちょっとにじみ出したような気がした。

7 水たまり

2011年、アクリル画、162.0×91.0cm

2011年春、水たまりに映った姿が骸骨になっている、なんてベタな絵を描くことにした。薔薇だってリンゴだって富士山だって、描きようでいい絵になる。ベタなものが悪いわけではない。

早速、資料集め。長靴は数年前に園芸店で下調べ済み。黄緑色にしようかと迷ったが、

結局、白にした。つづいて、骸骨。どこの小学校の理科室にもぶら下がってる骨格模型、あれをちょっと借りたいところ。そうだ、大学にもあるんじゃないかと思い、理科助手に訊いてみたが、無いとのこと。ならば、保健管理室には、こちらにも無いとのこと。やっぱり小学校か。付属小学校に問い合わせたところ、朗報。「理科室にぶら下がっていますよ」。借りるのは難しそうなので、早速、カメラ一式を持って行って、写真を撮らせてもらうことにした。理科室に三脚を立て、骸骨にポーズを付けてレンズを向けた。幸い春休み中だったので良かったが、もしも小学生がいたら、たちまち死神オヤジが現れたと大騒ぎになるところだ。

長靴、骸骨は揃った。あとは、水たまりに佇む女性の小花柄のワンピースだ。適度に疎らで、はっきりくっきりしていて、花は朱赤で、葉っぱは苔緑で、素朴な感じの小花柄がいい。早速、近くのアウトレットモールに探しに行った。が、女性客に混じってワンピースを物色するのは想像以上の苦行。「何かお探ですか?」と声を掛けられる寸前に店を出るを繰り返す。数店舗回ったが、イメージ通りのものなどあるはずもなく、徒労に終わった。仕方がない、気長に探そう。翌日、正午前、いつものように学食へ行き、定食の列に並んだ。と、目の前の女子学生のコートの下から少しだけ見えているスカートの柄に目が留まった。“あ、小花柄だ”イメージに近い。列を離れ、前に回ってみた。小花柄のワンピースだ。どうしよう……。一人カウンター席で食事をしながら考えた。女子学生は中ほどのテーブルで友達3人と楽しく食事中。これを逃したら二度と巡り会えないかもしれない。意を決した。「すみません、〇〇〇〇の者ですが、〇〇〇〇を描くために小花柄のワンピースを探しているんです。ネット等でも探してみるつもりですが、見つからなかった場合は、そのワンピースをお借りできますか?」。1名+友人3名の怪訝な眼差しを思いっきり浴びた後、ヒキツリ笑いの女子学生から学籍番号を教えてもらった。

よしこれで、準備オケー、描くぞー。気分よくスタートした途端、ふと思った。“小花柄のワンピースよりも白いシャツの方がいいかも……”。

8 スカラベ

2011年、アクリル画、182.0×227.5cm

小学校低学年くらいだったのか、家にあった百科事典の昆虫のページをよく開いていた。ハーキュリーズオオカブトムシ、アトラスオオカブトムシ、ゴライアスオオツノハナムグリなど夢のような昆虫がずらりと並んでいてワクワクした。そんな中で、一番の

お気に入りだったのは、黒くて、丸くて、ピカピカで、七色に光っている、オオセンチコガネ。見るたびにうっとりした。この虫の生態については何も知らなかった。あるとき、この虫がウンコを食べる虫だと聞かされた。しかも、ウンコを丸めて運んだりもするらしいとのこと。別名も知った、フンコロガシ。幼い私は大きな衝撃を受けた。実は、こんな遙か遠い昔の日が出発点になっているのかもしれない。

最近のこと。きれいだなーと思ってちぎり取ってきた飛行機の機内誌の1ページ。写真に写っているのは、南米高地の黄色い花が咲き乱れる小道。下から上へなだらかな丘を登るように視線が運ばれ、霧の中に迷い込む。まるで天国への小道だ。この構図を参考にして絵を描こうと思った。スケッチブックに何度も試し描きしているうちに、小道の真ん中に大きな球を描く構想を思いついた。そして、さらに、今度は、それを押す生き物が目に浮かんだ。フンコロガシ。最初はオオセンチコガネを描くつもりでいたのだが、だんだん変容して人間フンコロガシに化けてしまった。

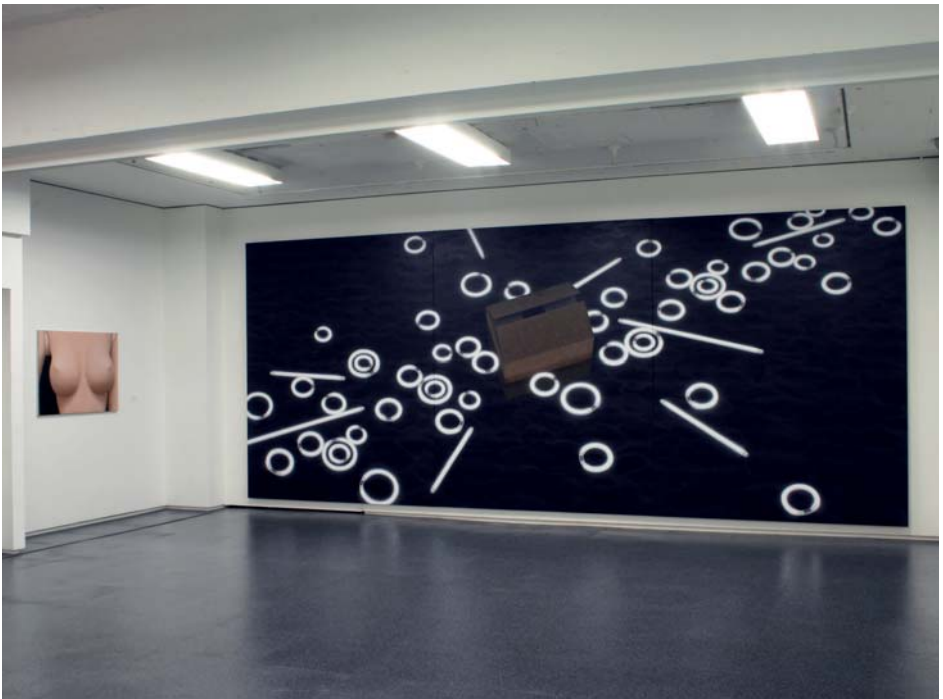
西南学院大学人間科学部児童教育学科



1 Polar Bear



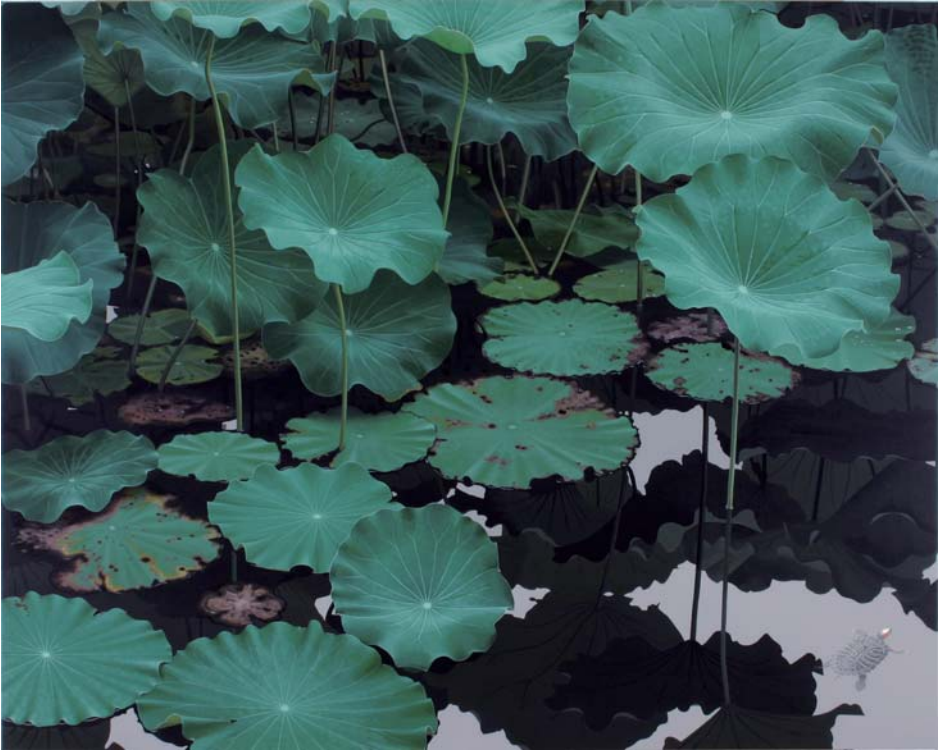
2 Fish eye



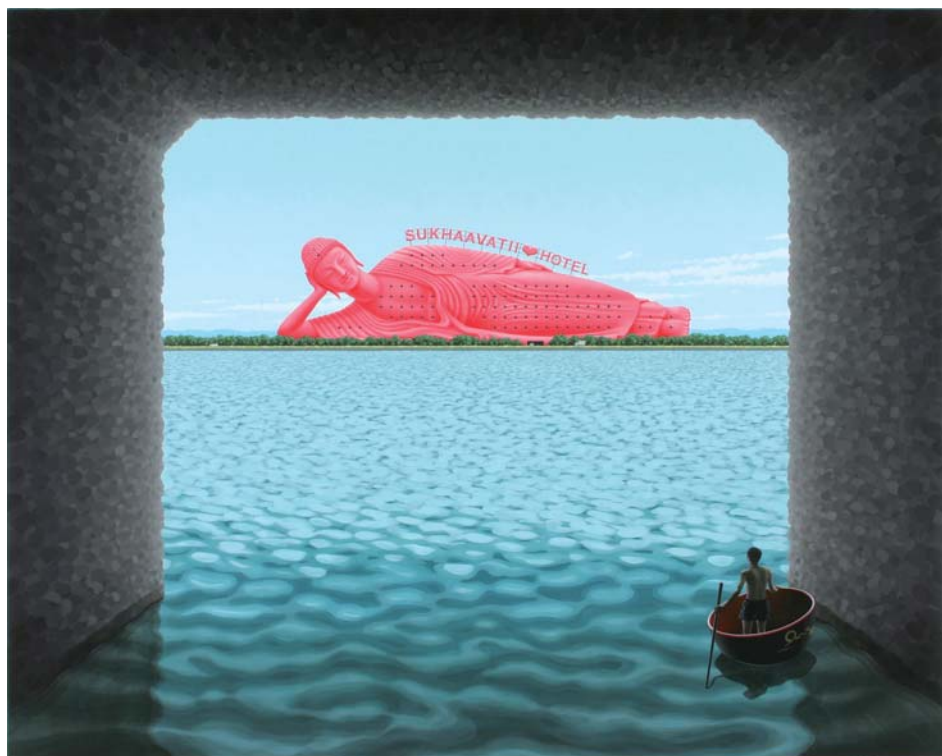
3 Ark ※個展会場（右：Ark、左：人形の胸）



4 なみだ目



5 イノセンス



6 極楽ホテル



7 水たまり



8 スカラベ